

第30回 研究助成

**A 研究部門・報告IV・英語能力テストに関する研究**

# スピーキング練習における特定文法項目に焦点を 当てた直接的修正フィードバックの効果検証

研究者:愛知県／名古屋大学大学院 在籍 小林 真実

《研究助言者:池田 央》

**概要**

本研究の目的は、英語のスピーキング指導における焦点化修正フィードバックの効果検証である。教師が学習者に多くのフィードバックを与えた場合、アップティクにつながらないとの指摘がある(Truscott, 1996, 1999)。本研究は、動詞の過去形に焦点を当てた焦点化修正フィードバックと、動詞の過去形、定動詞の欠落、目的語の欠落、前置詞の欠落、能動態のエラー、受動態のエラーについて修正フィードバックを行う非焦点化修正フィードバックの効果を比較し、学習者の文法的正確性に効果的な修正フィードバックを検証した。実験参加者を3群に分けて、焦点化修正フィードバックを与える実験群、非焦点化修正フィードバックを与える比較群、修正フィードバックを与えない統制群を設けた。その結果、事前テストと3、4週間後の遅延事後テストの比較において、動詞過去形のエラーの減少は有意傾向がみられたが、3群の差はみられなかった。

**1**

## はじめに

**1.1 研究目的**

本研究の目的は、英語のスピーキング練習においてエラーに対し修正を促す修正フィードバック(corrective feedback)の対象を1つの文法項目に限定した焦点化修正フィードバックの効果

検証である。スピーキング練習において、1つの文法項目について教師がエラーを指摘し、正しい形を示す焦点化直接的修正フィードバックを行った場合と、複数の文法項目について直接的修正フィードバックを行う非焦点化直接的修正フィードバックを行った場合の、直後事後テストおよび遅延事後テストにおける発話の文法的正確性の向上を比較し、効果的な修正フィードバックの方法を検証した。

**1.2 フィードバック**

第二言語習得において、フィードバックとは学習者のアウトプットについて教師などが言及するものであり、その方法は多岐に渡る。学習者の正しい答えを褒めることにより学習者の答えが正しい、もしくは良いと伝える方法や、学習者が間違ったアウトプットをしたときに、エラーが発生したことを知らせる明確化の要求、エラーに関する明示的説明、学習者自身がエラーに気付くことを促すリキャスト、自己訂正の促し、学習者の犯したエラーの繰り返し、メタ言語フィードバックが挙げられる。また、フィードバックは教師だけが行うとは限らず、他の学習者がフィードバックを行う場合もある。また、英語の指導現場において、教師は学習者に繰り返しフィードバックを与えるが、1度のみフィードバックを与えた場合も長期的効果があると報告されている(Chandler, 2003; Van Beuningen, De Jong, & Kuiken, 2012など)。また、フィードバックの種

類により異なった効果があると報告されている(Saeb, 2014; Shintani, Ellis, & Suzuki (2014); Van Beuningen, De Jong, & Kuiken, 2012 など)。

### 1.2.1 直接的修正フィードバックと間接的修正フィードバック

修正フィードバックとは、教師がエラーを指摘する種類のフィードバックであり、その方法には2種類ある。直接的修正フィードバックとは、教師が学習者のエラーを指摘し、修正するものである。例えば、学習者が“*I go to the coffee shop yesterday*”と言った場合、教師は“*go*”はエラーであることを指摘し、“*I went to the coffee shop yesterday*”が正しい文であることを伝える。一方で、間接的修正フィードバックとは、教師は学習者のエラーを指摘するが、エラーを正しい形に修正しないものである。上に挙げた例の場合、教師は“*go*”はエラーであることを指摘するが、正しい形は“*went*”であることを提示せず、学習者自身が正しい形を考えることを促す。学習者のライティングにおける修正フィードバックの効果については研究が行われており、直接的修正フィードバックは間接的修正フィードバックより文法的正確性が向上すると報告されている。Van Beuningen et al.(2012)は、ライティング指導における直接的および間接的修正フィードバックの文法的正確性への効果の検証を行った。直接的および間接的修正フィードバックを与えられた実験参加者は、ライティングを学習者自身が修正する自己修正を行った参加者や、フィードバックと自己修正を行わずにライティングの練習を多く行った参加者と比して、新しいライティング課題を行ったときの文法的および語彙的正確性の向上への効果が高かった。また、直接的修正フィードバックを与えられた実験参加者は、文法的正確性が向上したのに対し、間接的修正フィードバックを与えられた実験参加者は、語彙的正確性が向上した。この研究結果から、直接的修正フィードバックは間接的修正フィードバックと比して文法的正確性により多くの注意が向かれると言えるであろう。

### 1.2.2 直接的修正フィードバックとメタ言語的説明

メタ言語的説明とは、教室内でみられる学習者のエラーについて教師が説明を行うものである。Shintani, Ellis, & Suzuki(2014)は、ライティングにおける直接的修正フィードバックとメタ言語的説明の効果を比較するため、学習者のライティングの仮定法と不定冠詞のエラーについて直接的修正フィードバックとメタ言語的説明を行い、比較検証した。その結果、仮定法のエラーには直接的修正フィードバックとメタ言語的説明はどちらも効果が認められたが、不定冠詞にはどちらのフィードバックも効果が確認されなかつた。また、直接的修正フィードバックはメタ言語的説明と比して長期的効果が認められた。この結果から、文法項目によりフィードバックの効果は異なるが、直接的修正フィードバックはメタ言語的説明と比してより多くの長期的効果があることが明らかになった。

### 1.2.3 焦点化修正フィードバックと非焦点化修正フィードバック

教師によるフィードバックは英語教育現場において広く使用されているが、修正フィードバックの問題点として、複数の修正フィードバックを与えた場合、学習者がフィードバックを認識して理解するというアップテイクが起こらないという指摘がある(Truscott, 1996, 1999)。その理由として、教師から多くのフィードバックを与えられると、学習者は全ての修正フィードバックの内容に注意を向けるのが困難となり、その結果フィードバックから自分の発話をモニタリングして必要に応じて修正することができなくなる。そのため、文法への修正フィードバックは効果がないと説明している。

この問題の解決策として、一度に多くのフィードバックを与えず、限られた文法項目についてフィードバックを与えるという方法があり、焦点化修正フィードバックと呼ばれる(Sheen, 2007)。特定の文法項目について修正フィードバックを与える方法であり、対象文法項目は1項目の場合や数項目の場合もある。一方で、非焦点化修正フィードバックとは、焦点化修正フィードバックより多い項目数、もしくは全ての文法項目につ

いて修正フィードバックを与えるものであり、事前に複数の文法項目を選択してフィードバックを与える場合と、文法項目を特定せずに全ての文法的エラーについて修正フィードバックを与える場合がある。

第二言語のライティングにおける焦点化修正フィードバックは、焦点化修正フィードバックの効果が認められており、学習者はライティングについて焦点化修正フィードバックを与えられた後に新しいライティングタスクを行う場合、非焦点化修正フィードバックを受けた場合として文法的正確性が向上すると報告されている。Sheen, Wright, & Moldawa(2009)は日本の大學生を対象に、冠詞の修正フィードバックを与える焦点化群、冠詞、動詞の過去形、前置詞について修正フィードバックを与える非焦点化群、修正フィードバックを与えない統制群を設けてライティングタスクを与えた。その結果、焦点化群と非焦点化群は新しいライティングタスクにおいて、統制群と比して文法的正確性が向上した。直後事後テストでは焦点化群と非焦点化群の間に差はみられなかったが、4週間後に行われた遅延事後テストでは焦点化群は非焦点化群より文法的正確性が高かった。その一方で、事後テストでは焦点化群と非焦点化群では差がみられないと報告する研究もある(Saeb, 2014)。

#### 1.2.4 直接的修正フィードバックの対象文法項目

学習者がエラーに気付くことにより修正フィードバックの効果が表れると指摘されている(Ellis, 2005など)。また、修正フィードバックは、対象文法項目により英語学習者がエラーに気付く割合が異なるとされており、動詞の過去形のエラーに修正フィードバックを与えた場合は、疑問文に関するエラーと比して、学習者は気付きやすいと報告されている(Kartchava & Ammar, 2014)。直接的修正フィードバックとメタ言語的説明の効果を比較検証したShintani, Ellis, & Suzuki(2014)では、対象文法項目により、2つのフィードバック方法の効果が異なっていた。仮定法のエラーにはどちらのフィードバック方法も効果がみられた一方で、不定冠詞のエラーについてはどちらの方法も効果が認められなかった。

明示的に誤りを訂正する修正フィードバックが効果的であるのは、「規則の内部構造が単純な項目」、「語彙的意味の伝達が主となる項目」、「日本語(母語)に同じか類似した概念・構造が存在する項目」、「今までに十分教えられてこなかった項目」であるとされている。反対に、「規則の内部構造が複雑な項目」、「文法的機能の伝達が主となる項目」、「日本語(母語)に同じか類似した概念・構造が存在しない項目」、「その規則についてすでに十分な知識を持っている項目」は明示的な誤り訂正が効果的ではないとされている(白畠, 2015, p. 182)。

修正フィードバックを行う文法項目により効果が異なり、またフィードバックを与えてもその効果がみられない文法項目もあるため、フィードバックに関する検証を行う際には、フィードバックが効果を持つ対象文法項目を選択し、文法項目による影響が結果を左右しないようにする必要がある。

#### 1.2.5 第二言語スピーキングにおける修正フィードバックの研究

スピーキングにおける紙面上の修正フィードバックに関しては、ライティングと比べて十分に研究が行われていないが、Date & Takatsuka(2012)は、スピーキングにおける自己修正と間接的修正フィードバックの効果を検証した。漫画描写タスクの発話について、実験参加者が自ら書き起こして修正した後、修正が不十分である参加者には実験実施者が間接的修正フィードバックを与え、参加者は修正されたスクリプトを黙読した。その後、同じ漫画の描写タスクおよび新しい漫画の描写タスクを実施し、最初のタスクの発話と文法的正確性を比較したところ、同じタスクと新しいタスクの発話において、書き起こし、自己修正、間接的修正フィードバック、黙読の機会を与えられなかった参加者と比して、文法的正確性が向上した。この結果から、修正フィードバックはスピーキングにおいても効果があると予測されるが、この研究において、1度目の発話後に書き起こし、自己修正、黙読の要因も行っているため、文法的正確性の向上は、修正フィードバックによるものではない可能性がある。また、間接的修正フィードバックを行ったため、

直接的修正フィードバックの効果も明らかにされていない。

### 1.2.6 先行研究の改善点および

#### それらの解決案

第二言語ライティングに関する研究において、焦点化直接的修正フィードバックを行う場合、非焦点化直接的修正フィードバックを行う場合と比べて、新しいタスクにおける文法的正確性が向上する可能性が報告されている。しかし、第二言語のスピーキングについては、焦点化直接的修正フィードバックの効果が十分に検証されておらず、スピーキング指導における効果的な修正フィードバックの方法は明らかにされていない。しかし、ライティングに関する結果から、スピーキング指導においても、焦点化直接的修正フィードバックの効果があると予想される。

### 1.3 研究課題

上述の先行研究の知見を踏まえて、本研究が設定する研究課題は以下のとおりである。

1. 英語スピーキングにおいて、動詞の過去形のエラーを修正フィードバックの対象文法項目とした焦点化修正フィードバックは、動詞の過去形、定動詞の欠落、目的語の欠落、前置詞の欠落、能動態および受動態のエラーを修正フィードバックの対象文法項目とした非焦点化修正フィードバックと比して、直後に別のタスクを行ったときに、動詞の過去形、定動詞の欠落、目的語の欠落、前置詞の欠落、能動態および受動態のエラー率は減少するか。
2. 英語スピーキングにおいて、動詞の過去形のエラーを修正フィードバックの対象文法項目とした焦点化修正フィードバックは、動詞の過去形、定動詞の欠落、目的語の欠落、前置詞の欠落、能動態および受動態のエラーを修正フィードバックの対象文法項目とした非焦点化修正フィードバックと比して、3週間から4週間後に別のタスクを行ったときに、動詞の過去形、定動詞の欠落、目的語の欠落、前置詞の欠落、能動態および受動態のエラー率は減少するか。

研究課題1と2に取り組むために、本研究では、焦点化直接的修正フィードバックを与える群、非焦点化直接的修正フィードバックを与える群、直接的修正フィードバックを与えない群の3群に分けて、(1)事前テスト、(2)フィードバック、(3)フィードバック後のテスト、(4)直後事後テスト、(5)遅延事後テストを行い、(1)事前テストのエラー率を(4)直後事後テストのエラー率および(5)遅延事後テストのエラー率と比較し、(4)直後事後テスト、(5)遅延事後テストにおける文法的正確性の向上を調査した。

## 2

### 本研究の内容

#### 2.1 実験参加者

本研究の実験参加者は、日本語を母語とする大学学部生であり、年齢幅は18歳から22歳（最頻値は19）であった。参加者は、少なくとも6年間は日本での教育機関で英語を学習しており、大学での専攻は、工学、農学、文学などさまざまであった。調査時の英語力（自己申請）は、TOEFL ITP® 平均499.53 ( $SD = 46.17$ ) であった。4名の実験参加者は TOEFL ITP® の受験経験がなかったが、TOEIC® の点数は平均633.75 ( $Min = 540$ ,  $Max = 690$ ,  $SD = 56.499$ ) であった。

実験参加者は、実験内容、所要時間、謝礼および個人情報保護に関する説明を受け、同意した後に約90分間の実験を行った。実験の参加に同意した51名を無作為に3群に分けて、動詞過去形について修正フィードバックを与える実験群 ( $n = 17$ , TOEFL ITP®  $M = 451.611$ ,  $SD = 167.917$ )、動詞の時制、動詞の欠如、目的節の欠如、前置詞について修正フィードバックを与える比較群 ( $n = 16$ , TOEFL ITP®  $M = 378.944$ ,  $SD = 204.911$ )、修正フィードバックを与えない統制群 ( $n = 15$ , TOEFL ITP®  $M = 470.563$ ,  $SD = 128.163$ ) を設けた。実験参加者51名の内、2名は2度目の実験実施に参加しなかったため、分析から除外した。また、1名は発話の録音に失敗したため、分析から除外した。残りの48名の発話を分析の対象とした。

## 2.2 本研究で使用したタスク

本実験は、スピーキングタスクとしてナラティブタスクを行った。6コマ漫画(Heaton, 1975)を使用した。漫画を見たことのない人がストーリーを理解できるように説明するよう指示した。実験参加者は、60秒間で漫画を見てストーリーを把握し、実験実施者である筆者は、実験参加者がストーリーを理解したことを探査し、参加者がストーリーを理解していないかった場合のみ日本語でストーリーを説明した。その後、参加者は90秒間でストーリーを説明した。漫画を見ながら発話したため、発話はストーリーを記憶する必要のない状態で行った。

## 2.3 直接的修正フィードバック

本研究では、エラーを指摘し正しい文法形式を示す直接的修正フィードバックを与えた。外国語のライティングに関する研究において、直接的修正フィードバックは、エラーの指摘のみを行う間接的修正フィードバックと比して正確性の向上を報告する研究が多い(Van Beuningen, et al., 2012など)ことが理由である。

また、フィードバックの実施方法は、口頭ではなく筆記で行った。スピーキング指導において、教師は口頭でフィードバックを提供することが多いが、フィードバックの内容を実験に合うように統制するには口頭では困難であり、筆記によるフィードバックはより正確に実施ができると考えられるため、筆記で行った。

焦点化修正フィードバックは、対象文法項目は1項目の場合や数項目の場合もあるが、本研究では1項目について修正フィードバックを与えるものを焦点化修正フィードバックとした。また、非焦点化修正フィードバックは、事前に複数の文法項目を選択してフィードバックを与える場合と、文法項目を特定せずに全ての文法的エラーについて修正フィードバックを与える場合があるが、本研究では下に挙げる6項目について修正フィードバックを与えるものとした。

修正フィードバックは、1.2.4で修正フィードバックが効果的であるとされていると述べたように、対象とする文法項目によりその効果が異なる。

るとされている。そのため本研究では、「規則の内部構造が単純である項目」、「語彙的意味の伝達が主となる項目」、「母語に同じか類似した概念・構造が存在する項目」である文法項目を選び、実験群および比較群の修正フィードバックの対象項目を以下のとおりとした。

**実験群** 動詞の過去形

**比較群** 動詞の過去形、定動詞の欠落、  
目的語の欠落、前置詞の欠落、  
能動態および受動態のエラー

本研究において、動詞の過去形のエラーとは、動詞が過去形であるべき箇所において過去形になっていないエラーを指すが、動詞の屈折のエラーは扱わなかった。例えば、“go”が“goed”となっていても、語彙的なエラーであり、動詞を過去形にする意思は見受けられるため文法的なエラーではないと考えて、エラーとしてみなさなかった。

定動詞の欠落とは、定動詞を使用しなければならない箇所(義務的文脈)において定動詞を使用していないものを指す。ただし、定動詞を使用しなければならない箇所に不定動詞がある場合は、語彙的なエラーであるのか文法的なエラーであるのか判別ができないため、定動詞の欠落としてみなさない。例えば、“he gone to the sea yesterday”という節において、動詞は正しくは“went”であるが、実験参加者が“go”的過去形として“gone”と言ったのか(語彙的エラー)、現在完了形“has gone”を誤って“gone”と言ったのか(文法的エラー)判断できないため、定動詞欠落のエラーとしてカウントしなかった。

目的語の欠落とは、目的語を使用しなければならない箇所(義務的文脈)において目的語が欠落しているものを指す。例えば、学習者が“he had in his hand”を産出した場合、“had”は他動詞であり目的語を使用しなければならないが、目的語を使用していないため、目的語の欠落とみなす。目的語を必要としない文において誤って目的語を入れた場合はエラーとしてみなさなかった。例えば、少年が泳いでいる絵を描写するとき“he swam himself”と言った場合、この文脈において“swam”は目的語を使用しないが、エラーとして扱わなかった。

前置詞の欠落とは、前置詞を使用しなければならない箇所(義務的文脈)において前置詞が欠落しているものを指す。例えば，“he went the sea”という節では，“sea”の前に“to”という前置詞を使用しなければならないが、前置詞を使用していないため、前置詞の欠落とみなした。前置詞を必要としない文において誤って前置詞を入れた場合は前置詞のエラーとして扱わなかった。例えば，“the bus splashed to water”という節において“water”は目的語であるためその前に“to”は使用すべきではないが、前置詞の欠落ではないため、エラーとしてカウントしなかった。また、前置詞が必要な文において不適切な前置詞を使用した場合、語彙的なエラーであるか文法的なエラーであるのか判別ができないため、前置詞の欠落としてみなさなかった。例えば，“there were many people on the town”という節において“on”という前置詞は不適切であるが、前置詞の欠落ではないため、エラーとして扱わなかった。

能動態のエラーとは、能動態を使用しなければならない箇所(義務的文脈)において受動態を使用した場合を指す。また、受動態のエラーとは、受動態を使用しなければならない箇所(義務的文脈)において能動態を使用した場合を指す。例え

ば、「男が少年をつかまえた」という意味の節において，“the boy was caught by the man”が正しい節であり、“the man was caught by the boy”は能動態のエラー，“the boy caught the man”は受動態のエラーである。また、受動態を使用しているが動詞の屈折におけるエラーがある場合は、語彙的エラーとみなし、受動態のエラーとしてみなさなかった。例えば，“the boy was catched by the man”は“caught”を誤って“catched”とした語彙的エラーであり、受動態のエラーとしてカウントしなかった。

## 2.4 実験手順

実験前に、実験群と比較群の実験参加者に、1つ目の発話について簡単なコメントをすると告げた。統制群の参加者には、発話を書き起こしたものを見せると伝えた。また、コメントおよび書き起こしたスクリプトを見せた後に、再度同じタスクを行うことも伝えた。全ての実験参加者は事前テストとして、1つ目の漫画描写タスク(タスクA)を行った。その後、参加者は5分間休憩を取った。休憩時間中は、辞書で英単語を調べること、および友人に電子メール等で英語に関する

■表1: 実験手順

	実験群	比較群	統制群
事前テスト(タスクA 1度目)			
第1回	休憩(書き起こし、フィードバック)	休憩(書き起こし、フィードバック)	休憩(書き起こし)
	書き起こしとフィードバックを読む	書き起こしとフィードバックを読む	書き起こしを読む
フィードバック後テスト(タスクA 2度目)			
直後事後テスト(タスクB)			
3-4週間の間隔			
第2回	遅延事後テスト(タスクC)		

■表2: タスクの実施順序

		サブグループ1	サブグループ2	サブグループ3
第1回	事前テスト	タスクA	タスクB	タスクC
	フィードバック後テスト	タスクA	タスクB	タスクC
	直後事後テスト	タスクB	タスクC	タスクA
第2回	遅延事後テスト	タスクC	タスクA	タスクB

質問をすること以外は何をしても良いと伝えた。休憩時間の間に実験実施者は発話の録音を聞いて、パソコンで書き起こし、実験群には焦点化直接的修正フィードバック、比較群には非焦点化直接的修正フィードバックを与えた。休憩時間後、実験群には書き起こしたスクリプトと焦点化直接的修正フィードバック、比較群には書き起こしたスクリプトと非焦点化直接的修正フィードバック、統制群には書き起こしたスクリプトを見せた。実験群と比較群には、一部のエラーを修正したと伝えた。実験参加者は書き起こしたスクリプトと修正フィードバックを読んだ後、フィードバック後テストとして再度同じタスク(タスクA)を行った。その後、直後事後テストとして2つ目の漫画描写タスク(タスクB)を行った。3-4週間後に遅延事後テストとして3つ目の漫画描写タスク(タスクC)を行った。手順を表1に示す。

また、漫画の描写における難易度の発話への影響を排除するため、3群を更に3つのサブグループに分けて、使用する漫画の順序を変えてカウンターバランスをとった。サブグループ1は、タスクA, A, B, Cの順番でタスクを行い、サブグループ2はタスクB, B, C, A、サブグループ3はタスクC, C, A, Bの順でタスクを実施した(表2)。

### 3 結果

#### 3.1 データ分析方法

多変量分散分析により3群のエラー率を比較した。従属変数は、エラー率とした。エラー率は、発話においてみられたエラーの数を、その発話において必要とされる箇所の数(義務的文脈)で割ったものとした。

#### 3.2 データ分析結果

焦点化直接的修正フィードバックと非焦点化直接的修正フィードバックの対象である動詞の過去形、および非焦点化直接的修正フィードバックの対象である定動詞の欠落、目的節の欠落、前置詞の欠落、能動態と受動態のエラー数の平均およ

び標準偏差と、これらの文法項目が必要とされる義務的文脈の件数(発生件数)の平均および標準偏差、エラー率を表3から表14に、焦点化直接的修正フィードバックの対象文法項目であった動詞過去形のエラー率を図1に示す。また、多変量分散分析の結果を資料1から10に示す。

事前テストの後に実験群と比較群に与えた直接的修正フィードバックの件数は、実験群は平均3.71回、比較群は平均5.00回であった(表3 実験群の過去形のエラー数および比較群の全エラー数を参照)。前置詞欠落および受動態のエラーについては、使用が必要とされる義務的文脈の発生がみられない発話があり、分析を行うことができなかったため、分析の対象から除外した。表5, 8, 11, 14では、NAと表記する。

事前テストと直後事後テストの比較において、実験群と比較群は全体的にエラー率が減少したが、統制群では差がみられなかった(表5, 11)。多変量分散分析を行った結果、テスト間に有意差があり(資料1)、直後事後テストにおいて6つの文法項目への焦点化および非焦点化直接的修正フィードバックの効果があったと考えられる。

焦点化直接的修正フィードバックの対象であった動詞の過去形のエラー率は、実験群と比較群の発話において減少しているが、統制群の発話では差がみられなかった(図1)。しかし、多変量分散分析の結果、実験群と比較群共にテスト間の有意差はみられず、小程度の効果量が確認された( $F(1, 88) = 1.98, p < .16, \eta^2 = .02$ )。また、群間においても有意差がなく、効果量もなかった( $F(2, 88) = .03, p < .96, \eta^2 = .00$ )。

動詞欠落のエラー率は、実験群および統制群において減少がみられたが、比較群においては差がみられなかった。多変量分散分析の結果、テスト間( $F(1, 88) = 2.35, p < .12, \eta^2 = .02$ )と群間( $F(2, 88) = 1.36, p < .26, \eta^2 = .02$ )において有意差がみられず、小程度の効果量があった。目的節欠落のエラーは、実験群と比較群はエラー率が減少したが、統制群は差がみられなかった。多変量分散分析の結果、テスト間は有意傾向であり、小程度の効果量があった( $F(1, 88) = 3.68, p < .05, \eta^2 = .03$ )が、群間においては有意差がなく、効果量もなかった( $F(2, 88) = .46, p < .62, \eta^2 = .00$ )。能動態であるべき箇所を誤って受動

態にするエラーは、比較群と統制群において小程度の減少がみられたが、実験群においては変化がみられなかった。多変量分散分析の結果、テスト間 ( $F(1, 88) = 1.81, p < .18 \eta^2 = .02$ ) およ

び群間 ( $F(2, 88) = .48, p < .61 \eta^2 = .01$ ) において有意差がみられなかったが、小程度の効果量が認められた。

事前テストと遅延事後テストの全体の比較に

■表3: 事前テスト エラー数

エラー数							
	過去形	動詞欠落	目的節欠落	前置詞欠落	能動態→受動態	受動態→能動態	全エラー
実験群 <i>M</i>	3.71	0.35	0.24	0.76	0.12	0.00	5.18
n=17 SD	2.42	0.59	0.42	0.64	0.32	0.00	4.40
比較群 <i>M</i>	4.13	0.13	0.13	0.56	0.06	0.00	5.00
n=16 SD	2.32	0.33	0.33	0.86	0.24	0.00	4.08
統制群 <i>M</i>	3.43	0.21	0.07	0.29	0.07	0.00	4.07
n=15 SD	3.09	0.56	0.26	0.59	0.26	0.00	4.75

(注) *M*は平均を表し、SDは標準偏差を表す。

■表4: 事前テスト 発生件数

発生件数						
	過去形	動詞	目的節	前置詞	能動態	受動態
実験群 <i>M</i>	8.12	8.12	1.29	7.53	3.76	0.06
n=17 SD	3.16	3.16	1.36	2.93	1.86	0.24
比較群 <i>M</i>	10.13	10.13	1.81	10.63	5.44	0.06
n=16 SD	3.64	3.64	1.59	3.46	2.45	0.24
統制群 <i>M</i>	8.71	8.71	1.93	8.86	4.43	0.64
n=15 SD	2.76	2.76	1.10	3.27	2.47	2.06

(注) *M*は平均を表し、SDは標準偏差を表す。

■表5: 事前テスト エラー率

エラー率(エラー数／発生件数)						
	過去形	動詞欠落	目的節欠落	前置詞欠落	能動態→受動態	受動態→能動態
実験群 <i>M</i>	0.46	0.05	0.04	0.23	0.01	NA
n=17 SD	0.23	0.07	0.07	0.25	0.03	NA
比較群 <i>M</i>	0.45	0.01	0.01	0.12	0.01	NA
n=16 SD	0.26	0.04	0.03	0.17	0.02	NA
統制群 <i>M</i>	0.41	0.02	0.01	NA	0.01	NA
n=15 SD	0.33	0.06	0.05	NA	0.03	NA

(注) *M*は平均を表し、SDは標準偏差を表す。

(注) NAは、発話において文法項目の義務的文脈の発生がなく、計算から除外したものを示す。

おける多変量分散分析の結果、有意差はみられなかった（資料6）。2つのテストにおけるエラー率の差（表5, 14）は、動詞の過去形の使用において、3群とも減少し（図1）、有意傾向があり、また

小程度の効果量があった（ $F(1, 88) = 3.77, p < .05 \eta^2 = .04$ ）。しかし、群間の差は有意差が認められず、効果量も確認されなかった（ $F(2, 88) = .10, p < .90 \eta^2 = .00$ ）。動詞欠落のエラーは、

■表6：フィードバック後テスト エラー数

エラー数							
	過去形	動詞欠落	目的節欠落	前置詞欠落	能動態→受動態	受動態→能動態	全エラー
実験群 <i>M</i>	2.35	0.12	0.06	0.76	0.06	0.12	3.47
n=17 SD	2.06	0.32	0.24	0.81	0.24	0.47	4.13
比較群 <i>M</i>	1.38	0.19	0.00	0.31	0.06	0.00	1.94
n=16 SD	1.22	0.39	0.00	0.46	0.24	0.00	2.31
統制群 <i>M</i>	3.57	0.14	0.14	0.79	0.00	0.14	4.79
n=15 SD	3.64	0.52	0.52	0.77	0.00	0.52	5.96

（注）*M*は平均を表し、SDは標準偏差を表す。

■表7：フィードバック後テスト 発生件数

発生件数						
	過去形	動詞	目的節	前置詞	能動態	受動態
実験群 <i>M</i>	9.76	9.82	2.18	9.71	5.18	0.24
n=17 SD	2.24	2.18	1.76	2.40	2.38	0.55
比較群 <i>M</i>	10.63	10.63	2.69	10.69	4.94	0.25
n=16 SD	3.37	3.37	1.36	3.72	2.49	0.56
統制群 <i>M</i>	10.07	10.07	2.07	10.79	5.86	0.29
n=15 SD	2.52	2.52	0.80	2.62	3.04	0.59

（注）*M*は平均を表し、SDは標準偏差を表す。

■表8：フィードバック後テスト エラー率

エラー率（エラー数／発生件数）						
	過去形	動詞欠落	目的節欠落	前置詞欠落	能動態→受動態	受動態→能動態
実験群 <i>M</i>	0.23	0.01	0.01	0.24	0.00	NA
n=17 SD	0.17	0.03	0.02	0.32	0.01	NA
比較群 <i>M</i>	0.12	0.02	0.00	0.05	0.00	NA
n=16 SD	0.11	0.04	0.00	0.09	0.02	NA
統制群 <i>M</i>	0.34	0.01	0.02	0.12	0.00	NA
n=15 SD	0.33	0.05	0.06	0.13	0.00	NA

（注）*M*は平均を表し、SDは標準偏差を表す。

（注）NAは、発話において文法項目の義務的文脈の発生がなく、計算から除外したものと示す。

実験群のみ減少し、比較群および統制群においては変化がみられなかった。また、群間の差は多変量分散分析により有意差が認められ、また中程度の効果量も確認された( $F(2, 88) = 2.84, p < .06 \eta^2 = .06$ )。

目的節欠落のエラーは、実験群のみ減少し、比較群と統制群では変化がみられなかった。しかし、多変量分散分析の結果、テスト間( $F(1, 88) = 1.02, p < .31 \eta^2 = .01$ )およ

■表9: 直後事後テスト エラー数

エラー数							
	過去形	動詞欠落	目的節欠落	前置詞欠落	能動態→受動態	受動態→能動態	全エラー
実験群 <i>M</i>	3.24	0.12	0.00	0.82	0.06	0.00	4.24
n=17 <i>SD</i>	2.16	0.32	0.00	1.04	0.24	0.00	3.76
比較群 <i>M</i>	3.06	0.06	0.06	0.63	0.00	0.00	3.81
n=16 <i>SD</i>	2.25	0.24	0.24	0.78	0.00	0.00	3.51
統制群 <i>M</i>	3.71	0.14	0.07	0.79	0.00	0.14	4.86
n=15 <i>SD</i>	2.43	0.35	0.26	0.86	0.00	0.35	4.25

(注) *M*は平均を表し、*SD*は標準偏差を表す。

■表10: 直後事後テスト 発生件数

発生件数						
	過去形	動詞	目的節	前置詞	能動態	受動態
実験群 <i>M</i>	8.82	8.82	2.00	8.65	4.29	0.24
n=17 <i>SD</i>	3.09	3.09	1.64	2.27	1.71	0.42
比較群 <i>M</i>	9.69	9.69	2.00	10.00	5.25	0.19
n=16 <i>SD</i>	2.31	2.31	1.54	3.64	2.25	0.53
統制群 <i>M</i>	9.36	9.36	2.36	9.36	5.00	0.29
n=15 <i>SD</i>	2.44	2.44	1.63	3.04	2.45	0.45

(注) *M*は平均を表し、*SD*は標準偏差を表す。

■表11: 直後事後テスト エラー率

エラー率(エラー数／発生件数)						
	過去形	動詞欠落	目的節欠落	前置詞欠落	能動態→受動態	受動態→能動態
実験群 <i>M</i>	0.35	0.02	0.00	0.21	0.01	NA
n=17 <i>SD</i>	0.22	0.05	0.00	0.29	0.02	NA
比較群 <i>M</i>	0.33	0.01	0.00	0.12	0.00	NA
n=16 <i>SD</i>	0.28	0.03	0.02	0.18	0.00	NA
統制群 <i>M</i>	0.41	0.01	0.01	0.23	0.00	NA
n=15 <i>SD</i>	0.32	0.03	0.03	0.28	0.00	NA

(注) *M*は平均を表し、*SD*は標準偏差を表す。

(注) NAは、発話において文法項目の義務的文脈の発生がなく、計算から除外したものを示す。

び群間 ( $F(2, 88) = .57, p < .56 \eta^2 = .01$ ) の有意差は認められず、小程度の効果量が確認された。前置詞の欠落は、実験群で減少した。比較群および統制群については、比較群は遅延事後テスト、

統制群は事前テストにおいて発生がない発話があったため、テスト間の比較は行わなかった。また、能動態であるべき箇所を誤って受動態にするエラーは、実験群および統制群においてわずか

■表12: 遅延事後テスト エラー数

エラー数							
	過去形	動詞欠落	目的節欠落	前置詞欠落	能動態→受動態	受動態→能動態	全エラー
実験群 <i>M</i>	2.59	0.29	0.12	0.53	0.00	0.00	3.53
n=17 SD	2.22	0.46	0.32	0.61	0.00	0.00	3.61
比較群 <i>M</i>	3.38	0.06	0.13	0.44	0.19	0.00	4.19
n=16 SD	3.12	0.24	0.33	0.79	0.39	0.00	4.87
統制群 <i>M</i>	3.14	0.14	0.14	0.57	0.00	0.07	4.07
n=15 SD	2.26	0.35	0.35	0.73	0.00	0.26	3.95

(注) *M*は平均を表し、SDは標準偏差を表す。

■表13: 遅延事後テスト 発生件数

発生件数						
	過去形	動詞	目的節	前置詞	能動態	受動態
実験群 <i>M</i>	8.35	8.47	1.94	9.41	5.47	0.35
n=17 SD	3.01	3.07	1.51	3.36	2.93	0.48
比較群 <i>M</i>	9.38	9.38	2.50	9.44	5.44	0.19
n=16 SD	3.24	3.26	1.58	3.55	3.92	0.39
統制群 <i>M</i>	9.29	9.29	1.79	7.57	3.43	0.29
n=15 SD	2.28	2.28	1.52	3.33	1.99	0.59

(注) *M*は平均を表し、SDは標準偏差を表す。

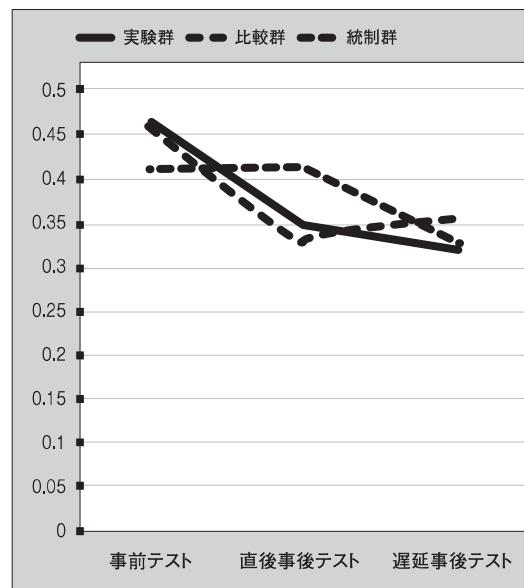
■表14: 遅延事後テスト エラー率

エラー率(エラー数／発生件数)						
	過去形	動詞欠落	目的節欠落	前置詞欠落	能動態→受動態	受動態→能動態
実験群 <i>M</i>	0.32	0.04	0.01	0.08	0.00	NA
n=17 SD	0.25	0.06	0.03	0.10	0.00	NA
比較群 <i>M</i>	0.35	0.01	0.01	NA	0.02	NA
n=16 SD	0.29	0.03	0.03	NA	0.04	NA
統制群 <i>M</i>	0.33	0.02	0.01	0.16	0.00	NA
n=15 SD	0.24	0.04	0.03	0.21	0.00	NA

(注) *M*は平均を表し、SDは標準偏差を表す。

(注) NAは、発話において文法項目の義務的文脈の発生がなく、計算から除外したものと示す。

かな現象があったが、テスト間( $F(1, 88) = .18$ ,  $p < .66$   $\eta^2 = .00$ )および群間( $F(2, 88) = .88$ ,  $p < .41$   $\eta^2 = .01$ )において有意差はなかった。テスト間においては効果量がなかったが、群間では小程度の効果量が確認された。



■図1: 3群の動詞過去形のエラー率

## 4

### 議論

#### 4.1 議論と考察

実験の結果から、全体における比較、焦点化直接的修正フィードバックの対象であった動詞過去形の使用に関するエラー率の比較、また非焦点化直接的修正フィードバックの対象であった定動詞の欠落、目的語の欠落、前置詞の欠落、能動態および受動態のエラー率の比較を行う。

##### 4.1.1 直後事後テストにおける

###### 焦点化直接的修正フィードバックの影響

研究課題1は、動詞の過去形のエラーについて焦点化直接修正フィードバックを与えた場合、非焦点化直接修正フィードバックを与えた場合と比較して、効果事前テストと直後事後テストの動詞の過去形、定動詞の欠落、目的語の欠落、前置詞の欠落、能動態および受動態のエラー率が減少す

るのかであった。発生件数に対するエラーの割合は、6つの文法項目を総合的に見ると、実験群および比較群において減少したが、統制群では差が確認されなかった。多変量分散分析の結果によるとテスト間に有意差があり、群間には有意差が認められなかったため、直接的修正フィードバックに関わらず、文法的正確性に意識が向けられている可能性が示唆された。

しかし、事前テスト、フィードバック後のテスト(事前テストと同じタスク)、直後事後テスト、遅延事後テストにおける文法項目別に3群のエラー率の変化を見ると、異なる傾向が確認された。動詞の過去形において、事前テストとフィードバック後のテストのエラー率の減少は群間で差がみられた。事前テストでは、実験群の過去形のエラー率(.46)は比較群(.45)と差がなかったが、事前テストの発話のスクリプトおよびフィードバックを読んだ後に同じタスクを行ったとき、実験群の過去形のエラー率(.23)は比較群のエラー率(.12)より高かった。実験群は動詞の過去形のエラーのみに修正フィードバックを与えられたにもかかわらず、比較群と比してエラー率は減少しなかった。また、動詞の過去形を使用する義務的文脈の件数は、実験群(事前テスト 平均8.12件、フィードバック後のテスト 平均9.76件)も比較群(事前テスト 平均10.13件、フィードバック後のテスト 平均10.63件)も減少していないため、過去形の使用的回避はみられなかった。更に、統制群の事前テストの過去形のエラー率(.41)は実験群や比較群より少なかったが、スクリプトを読んだ後に同じタスクを再度行ったとき、統制群は他の2群と比してエラー率が高かった(.34)。この結果から、文法的正確性について直接的フィードバックを行った場合、文法的正確性に注意が向き、動詞の過去形に関しては正確性が向上することが示唆された。しかし、その後に直後事後テストとして別のタスクを行った場合、群間で有意差はなかったため、新しいタスクの実施時の発話には修正フィードバックの影響は及ばないことがわかった。

目的節の欠落については、群間で有意差がみられた。エラー率の数値は小さくエラーの変化を観測するのが困難であるため、エラー数と義務的文脈の件数を検証したところ、実験群と比較群において、事前テストにおける目的節欠落のエラー

数は、統制群より多かった(実験群 平均.24回, 比較群 平均.13回, 統制群 平均.07回)が、フィードバック後に同じタスクを行ったとき、実験群と比較群の発話における目的節の義務的文脈の件数は増加しているにもかかわらず、エラー数は減少した(実験群 平均.06回, 比較群 平均.00回)。その一方で、統制群のエラー数は増加した(平均.14回)。しかし直後遅延テストでは、実験群の発話におけるエラー数は減少したが(平均.00回), 比較群の発話ではエラー数が増加し(平均.06回), 統制群では事前テストと同様の結果となった(平均.07回)。直接的修正フィードバックを与えられた後に同じタスクを行ったときの発話において、文法的側面への注意が増加して目的節の欠落のエラーは減少するが、動詞により目的節の必要性が左右されるため、目的節の使用は、文法的側面だけでなく語彙的側面も関係しており、新しいタスクを行ったときには修正フィードバックの効果が表れなかったと考えられる。

前置詞の欠落のエラーは、統制群の事前テストの発話では義務的文脈がみられなかつたため、実験群と比較群の発話のみ検証した。事前テストにおいて、実験群のエラー率は.23, 比較群は.12であったが、フィードバック後のテストにおいて、実験群のエラー率は変化がみられなかつた(.24)のに対し、比較群は大きく減少した(.5)。しかし、直後事後テストで新しいタスクを行つたとき、エラー率は事前テストと変わらない結果となつた(実験群 .21, 比較群 .12)。前置詞の正確な使用には、後続する目的語に関する語彙的知識が必要である。事前テストで誤って使用した前置詞について直接的修正フィードバックを与えられた比較群は、フィードバック後の同じタスクにおいて正しく使用することが可能となりエラー率が減少したが、その後に新しいタスクを行つたときは事前テストとは別の目的語を使用し、それらの目的語における前置詞に関するインプットを受けていなかつたため、前置詞の正確な使用において事前テストと同様の結果になつたと考えられる。

これらの結果から、直接的修正フィードバックは、焦点化されている場合および焦点化されていない場合において、フィードバック後のテストおよび直後事後テストの発話の正確性が向

上する場合があり、文法的正確性に注意が向けられていることが示唆されたが、語彙的知識を必要とする文法項目においては、修正フィードバックの効果はみられないことが明らかになった。

#### 4.1.2 遅延事後テストにおける

##### 焦点化直接的修正フィードバックの影響

研究課題2は、動詞の過去形のエラーについて焦点化直接修正フィードバックを与えた場合、非焦点化直接修正フィードバックを与えた場合と比して、効果事前テストと遅延事後テストの動詞の過去形、定動詞の欠落、目的語の欠落、前置詞の欠落、能動態および受動態のエラー率が減少するのかであった。

多変量分散分析の結果、動詞過去形のエラーに関して、テスト間の差に有意傾向がみられた。実験群と比較群の発話では、フィードバック後のテストにおいて事前テストからエラー率が減少したのに対し、統制群では大きな減少がみられなかつた(実験群 .46→.23, 比較群 .45→.12, 統制群 .41→.34)。しかし、3, 4週間後に行った遅延事後テストの発話では、3群のエラー率に差がみられなかつた(実験群 .32, 比較群 .35, 統制群 .33)。この結果から、直接的修正フィードバックの有無に関わらず、漫画描写タスクを繰り返し行い、またその内の1つの発話を書き起こしたスクリプトを読むことにより、動詞の過去形のエラーは減少することが示唆された。

また、目的節の欠落に関して、群間に差がみられた。実験群の発話において、事前テストおよび遅延事後テストのエラー率は減少した(.04→.01)が、比較群および統制群の発話ではテスト間に差がみられなかつた(比較群 .01→.01, 統制群 .02→.02)。エラー数をみると、事前テストにおいて実験群は4名の発話において目的節欠落のエラーがみられたが、遅延事後テストではエラーがあったのは2名の発話となつた。その一方で、比較群では事前テストで2名の発話においてエラーがあり、遅延事後テストにおいても2名の発話でエラーがみられた。また、統制群では、事前テストでは1名の発話でエラーがあつたが、遅延事後テストでは2名の発話でエラーが発生した。能動態を使用すべき箇所において受動態を使用するエラーは、事前テストにおいて各群ともエ

ラーが発生していたが(実験群 平均 .12回, エラー率 .01, 統制群 平均 .07回, エラー率 .01), 遅延事後テストにおいては, 実験群と統制群ではほとんどエラーがみられなくなった(実験群 平均 .00回, エラー率 .00, 統制群 平均 .00回, エラー率 .00)。その一方で, 比較群はエラーが増加した(事前テスト 平均 .06回, エラー率 .01, 遅延事後テスト 平均 .19回, エラー率 .02)。比較群は, 修正フィードバックの対象文法項目が他の2群と比べて多かったために, 態の正しい使用に注意を向けることが困難になった可能性があるが, 3群の発話において, 態のエラーの発生件数が少ないため, 更なる検証が必要である。

これらの結果から, 直接的修正フィードバックは, 焦点化されている場合および焦点化されていない場合において, フィードバック後のテストおよび遅延事後テストの発話の正確性は, 文法項目により若干の差がみられるものの, 大きな差はみられないことが示唆された。動詞の過去形のエラーについては, 直接的修正フィードバックは, 遅延事後テストには影響が及ばず, 漫画描写タスクを複数回行うことや, 発話を書き起こしたスクリプトを読むことが文法的正確性の長期的な向上につながると考えられる。しかし, 今回の結果は, 漫画描写タスクの繰り返しの影響によるものか, 発話のスクリプトを読んだことによるものか検証していないため, これらの2つの要因について検証が必要である。

#### 4.1.3 直接的修正フィードバックの効果

本研究は, 焦点化および非焦点化直接的修正フィードバックの影響を検証したが, 2種類の修正フィードバックの効果には大きな差がみられなかった。直接的修正フィードバックを与えた文法項目のエラー率が減少するとは限らず, 修正フィードバックを与えた文法項目のエラー率も減少した。また, 直接的修正フィードバックを与えた実験群と比較群は, 直接的修正フィードバックを与えたなかった統制群と比して, 全体的なエラー率が減少した。これらの結果から, 修正フィードバックを与えることは文法的正確性に注意を向けることを促し, 文法的エラーが減少する効果があると考えられる。しかし, 多変量分散分析の結果, 有意差がみられない項目が多かった

ため, 解釈には注意が必要である。

また, 目的節や前置詞は, 文法的知識だけでなく語彙的知識も必要とする。そのため, 文法的正確性に注意を向けるための修正フィードバックのみでエラーを防ぐことが難しく, 語彙に関する指導も必要である。

Truscott (2004) は, 第二言語のライティング指導において, 修正フィードバックを行うことにより, フィードバック対象である文法項目の使用を避ける可能性があると指摘しているが, スピーキング指導においてはその限りではないと言える。本研究において, 実験参加者が直接的修正フィードバックの対象文法項目の使用を避ける傾向はみられなかった。修正フィードバックを与えられた実験群と比較群の発話における全てのフィードバック対象文法項目について, 文法項目を使用しなければならない義務的文脈の件数は減少していないことから, 修正フィードバックを受けても当該文法項目の回避は起こらないことが明らかになった。これは, 文法的エラーが起きたときに修正フィードバックを与えることにより対象文法項目の使用を避けて練習の機会を失う可能性について懸念する必要がないと言えるであろう。

#### 4.1.4 スピーキングとライティングにおける 焦点化直接的修正フィードバックの効果

第二言語ライティングにおける焦点化直接的修正フィードバックに関する研究では, 焦点化および非焦点化直接的修正フィードバックを受けた場合, 直接的修正フィードバックを受けなかった場合と比して, 新しいタスクを行う直後事後テストにおいて焦点化修正フィードバックの対象文法項目である冠詞の正確性が向上した。また, 遅延事後テストでは, 焦点化直接的修正フィードバックを受けた群は, 非焦点化直接的修正フィードバックを受けた群と比して冠詞の正確性が向上した(Ellis, et al., 2008)。本研究における第二言語スピーキングに関する調査では, ライティングの先行研究と同様に, 直後事後テストにおいて, 修正フィードバックを受けた実験群と比較群の発話では, 焦点化修正フィードバックの対象文法項目である動詞の過去形の正確性が向上したが, 遅延事後テストにおいても, 修正フィードバックを受けた2群は動詞の過去形の正確性の向上が

あり、実験群と比較群の間に差はみられなかった。この結果より、少なくともスピーキング指導において、焦点化直接的修正フィードバックも非焦点化直接的修正フィードバックも、同等の効果があるといえるであろう。

## 4.2 今後の課題

本研究は、スピーキング指導における直接的修正フィードバックを扱った。口頭ではなく筆記によるフィードバックを行ったが、その理由は、2.3の本研究で実施するフィードバックの項で述べたように、実験目的に合ったフィードバックを正確に実施するために、筆記によるフィードバックを行ったが、その結果、発話を書き起こしたものを見た実験参加者が読むという要因が発生し、それが結果に影響を及ぼした可能性がある。

また、本研究はスピーキング練習における直接的修正フィードバックであるが、口頭で直接的修正フィードバックを与える前に、書き起こしたものを見せて直接的修正フィードバックを与えた。そのため、通常の教室のスピーキング指導において多くみられるフィードバックとは異なるものであり、直接応用することは難しいであろう。しかし、筆記による直接的修正フィードバックは、大きなクラスでは現実的なフィードバック方法であり、本研究の結果は、学校教育において多くみられる、30名や40名といった大教室で行われる英語スピーキングの授業では、指導への示唆となるであろう。

焦点化された直接的修正フィードバックを与える文法項目は、本研究では動詞の過去形を対象とした。しかし、実験参加者の発話において動詞の過去形のエラーは最も多く発生しており、その結果、事前テスト後に行ったフィードバックの回数は、実験群は平均3.71回( $SD=2.42$ )、比較群は平均5.00回( $SD=4.08$ )であり、実験群と比較群に対して与えたフィードバックの回数は十分な差がなかった可能性があり、そのため焦点化と非焦点化直接的修正フィードバックの影響が十分にみられなかったと考えられる。フィードバックを実施する文法項目を変えて検証する必要がある。

実験参加者の熟達度が結果に影響を及ぼし

た可能性も考慮すべきであろう。本研究では、参加者は無作為に3群に分けられたため、各群のTOEFL ITP® の点数には差が発生した(実験群  $M = 451.611$ ,  $SD = 167.917$ , 比較群  $M = 378.944$ ,  $SD = 204.911$ , 統制群  $M = 470.563$ ,  $SD = 128.163$ )。また、全参加者の熟達度においても差がみられた( $Max = 600$ ,  $Min = 393$ )。そのため、修正フィードバックを受けたとき、フィードバックの内容を正しく理解し、理解したことをその後の発話に応用する能力において、参加者間で差があった可能性がある。参加者の熟達度が結果に影響を及ぼした可能性があるため、熟達度を統制して追調査を行う必要がある。

また、動詞の過去形以外の文法項目において、エラーの発生件数が少なかったことも結果に影響を及ぼしていると考えられる(実験群 平均3.71回、比較群 平均5.00回)。比較群には非焦点化直接修正フィードバックを与えることにより、修正フィードバックの対象を増やし、実験参加者の注意を分散することを意図して実験をデザインしたが、実験群と比較群のフィードバック件数に十分な差がなかった可能性がある。更に、エラーの発生件数が少なかったため、十分な分析が行われなかったことも結果に影響していると考えられる。

実行可能性の問題から、本研究では実験参加者の人数が限られていたが、今後の課題としてサンプルサイズが少なかったことが挙げられる。サンプルサイズを増やし、より正確な調査が必要であろう。

## 謝辞

本研究の機会を与えてくださいました公益財団法人 日本英語検定協会の皆様と、研究助成選考委員の先生方、特に、助言担当の池田央先生に心より感謝申し上げます。また、名古屋大学の木下徹教授には研究に関する示唆に富んだご助言をいただきました。この場をお借りして感謝申し上げます。最後に、調査実施に際しては、調査に協力して頂いた48名の大学学部生の皆様に厚く御礼申し上げます。

## 参考文献 (\*は引用文献)

- AC Del Re (2013). compute.es: Compute Effect Sizes. R package version 0.2-2. URL <http://cran.r-project.org/web/packages/compute.es>
- \* Chandler, J. (2003). The efficacy of various kinds of error feedback for improvement in the accuracy and fluency of L2 student writing. *Journal of Second Language Writing*, 12, 267-296. doi:10.1016/S1060-3743(03)00038-9
- \* Date, M., & Takatsuka, S. (2012). Effects of Task Repetition on Oral Performance of the Same Task and a New Task of the Same Type. *ARELE*, 23, 345-360. DOI: 10.20581/arele.23.0.345
- \* Ellis, N. (2005). At the interface: Dynamic interactions of explicit and implicit language knowledge. *Studies in Second Language Acquisition*, 27, 305-352. 10+10170S027226310505014X
- \* Ellis, R., Sheen, Y., Murakami, M., & Takashima, H. (2008). The effects of focused and unfocused written corrective feedback in an English as a foreign language context. *System*, 36, 358-371. 10.1016/j.system.2008.02.001
- Hadley Wickham, Romain Francois, Lionel Henry and Kirill Muller (2017). dplyr: A Grammar of Data Manipulation. R package version 0.7.4. <https://CRAN.R-project.org/package=dplyr>
- Hays, M. J., Kornell, N. & Bjork, R. A. (2013). When and why a failed test potentiates the effectiveness of subsequent study. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, 39(1), 290-296.
- Heaton, J. (1975). Beginning composition through pictures. Harlow: Longman.
- \* Kartchava, E. & Ammar, A. (2014). The noticeability and effectiveness of corrective feedback in relation to target type. *Language Teaching Research*, 18(4), 428-452. 10.1177/1362168813519373
- Mackey, A. (2006). Feedback, noticing and instructed second language learning. *Applied Linguistics*, 27(3), 405-430.
- Panova, I. & Lyster, R. (2002). Patterns of corrective feedback and uptake in an adult ELS classroom. *TESOL Quarterly*, 36(4), 573-595.
- R Core Team (2016). R: A language and environment for statistical computing. R Foundation for Statistical Computing, Vienna, Austria. URL <https://www.R-project.org/>.
- Revelle, W. (2018) psych: Procedures for Personality and Psychological Research, Northwestern University, Evanston, Illinois, USA, <https://CRAN.R-project.org/package=psych> Version= 1.8.3.
- \* Saeb, F. (2014). The effects of focused and unfocused written corrective feedback on the grammatical accuracy of beginner EFL learners. *International Journal of Applied Linguistics & English Literature*, 3(2), 22-26. 10.7575/aiac.ijael.v.3n.2p.22
- \* Sheen, Y. (2007). The effect of focused written corrective feedback and language aptitude on ESL learners' acquisition of articles. *TESOL Quarterly*, 41, 255-283.
- \* Sheen, Y., Wright, D., & Moldawa, A. (2009). Differential effects of focused and unfocused written correction on the accurate use of grammatical forms by adult ESL learners. *System*, 37, 556-569. DOI: 10.1016/j.system.2009.09.002
- \* Shintani, N., Ellis, R., & Suzuki, W. (2014). Effects of Written Feedback and Revision on Learners' Accuracy in Using Two English Grammatical Structures. *Language Learning*, 64(1), 103-131. DOI: 10.1111/lang.12029
- \* 白畠知彦 (2015).『英語指導における効果的な誤り訂正—— 第二言語取得研究の見地から』東京:大修館書店
- Slawomir Jarek (2012). mvnormtest: Normality test for multivariate variables. R package version 0.1-9. <https://CRAN.R-project.org/package=mvnormtest>
- \* Truscott, J. (1996). The case against grammar correction in L2 writing classes. *Language Learning*, 46(2), 327-369.
- \* Truscott, J. (1999). The case for "The case against grammar correction in L2 writing classes": A response to Ferris. *Journal of Second Language Writing*, 8(2), 111-122.
- \* Truscott, J. (2004). Evidence and conjecture on the effects of correction: A response to Chandler. *Journal of Second Language Writing*, 13, 337-343. 10.1016/j.jslw.2004.05.002
- \* Van Beuningen, C., De Jong, N., & Kuiken, F. (2012). Evidence on the effectiveness of comprehensive error correction in second language writing. *Language Learning*, 62(1), 1-41. DOI: 10.1111/j.1467-9922.2011.00674.x
- Wickham, H. [aut, cre] & RStudio [cph], (2016). tidyR: Easily Tidy Data with 'spread()' and 'gather()' Functions (R package version 0.6.0). Retrieved from <https://CRAN.R-project.org/package=tidyR>

**資料1：事前テスト・直後事後テスト**

	自由度	Pillai	approx F	要因の自由度	残差の自由度	Pr(>F)
テスト	1	0.112858	2.70332	4	85	0.03572*
群	2	0.062141	0.68944	8	172	0.70050
テスト・群	2	0.054591	0.60332	8	172	0.77427
残差	88					

(注)0 '\*\*\*' 0.001 '\*\*' 0.01 '\*' 0.05 '.' 0.1 '' 1

**資料2：事前テスト・直後事後テスト、過去形**

	自由度	平方和	平均平方	統計量	Pr(>F)	$\eta^2$
テスト	1	0.1563	0.156344	1.9894	0.1619	0.02187
群	2	0.0055	0.002753	0.0350	0.9656	0.00077
テスト・群	2	0.0704	0.035191	0.4478	0.6405	0.00985
残差	88	6.9159	0.078589			
計	93	7.1481				

(注)0 '\*\*\*' 0.001 '\*\*' 0.01 '\*' 0.05 '.' 0.1 '' 1

**資料3：事前テスト・直後事後テスト、動詞欠落**

	自由度	平方和	平均平方	統計量	Pr(>F)	$\eta^2$
テスト	1	0.005890	0.0058900	2.3535	0.1286	0.02504
群	2	0.006822	0.0034108	1.3629	0.2613	0.02900
テスト・群	2	0.002292	0.0011461	0.4579	0.6341	0.00974
残差	88	0.220232	0.0025026			
計	93	0.235236				

(注)0 '\*\*\*' 0.001 '\*\*' 0.01 '\*' 0.05 '.' 0.1 '' 1

**資料4：事前テスト・直後事後テスト、目的節欠落**

	自由度	平方和	平均平方	統計量	Pr(>F)	$\eta^2$
テスト	1	0.006390	0.0063896	3.6884	0.05803	0.03871
群	2	0.001623	0.0008116	0.4685	0.62751	0.00983
テスト・群	2	0.004609	0.0023045	1.3303	0.26967	0.02792
残差	88	0.152448	0.0017324			
計		0.16507				

(注)0 '\*\*\*' 0.001 '\*\*' 0.01 '\*' 0.05 '.' 0.1 '' 1

**資料5：事前テスト・直後事後テスト、能動態→受動態**

	自由度	平方和	平均平方	統計量	Pr(>F)	$\eta^2$
テスト	1	0.000893	0.00089250	1.8167	0.1812	0.02002
群	2	0.000472	0.00023621	0.4808	0.6199	0.01058
テスト・群	2	0.000014	0.00000675	0.0137	0.9863	0.00031
残差	88	0.043233	0.00049128			
計	93	0.044612				

(注)0 '\*\*\*' 0.001 '\*\*' 0.01 '\*' 0.05 '.' 0.1 '' 1

#### 資料6：事前テスト・遅延事後テスト

	自由度	Pillai	approx F	要因の自由度	残差の自由度	Pr(>F)
テスト	1	0.055511	1.24893	4	85	0.2966
群	2	0.099268	1.12287	8	172	0.3502
テスト・群	2	0.057117	0.63206	8	172	0.7501
残差	88					

(注) 0 ‘\*\*\*’ 0.001 ‘\*\*’ 0.01 ‘\*’ 0.05 ‘.’ 0.1 ‘ ’ 1

#### 資料7：事前テスト・遅延事後テスト、過去形

	自由度	平方和	平均平方	統計量	Pr(>F)	$\eta^2$
テスト	1	0.2878	0.287763	3.7773	0.05515	0.04099
群	2	0.0161	0.008033	0.1054	0.90003	0.00229
テスト・群	2	0.0131	0.006569	0.0862	0.91747	0.00187
残差	88	6.7040	0.076182			
計	93					

(注) 0 ‘\*\*\*’ 0.001 ‘\*\*’ 0.01 ‘\*’ 0.05 ‘.’ 0.1 ‘ ’ 1

#### 資料8：事前テスト・遅延事後テスト、動詞欠落

	自由度	平方和	平均平方	統計量	Pr(>F)	$\eta^2$
テスト	1	0.000815	0.0008152	0.2681	0.60592	0.00285
群	2	0.017275	0.0086374	2.8403	0.06377	0.06046
テスト・群	2	0.000028	0.0000142	0.0047	0.99534	0.00010
残差	88	0.267607	0.0030410			
計	93	0.285725				

(注) 0 ‘\*\*\*’ 0.001 ‘\*\*’ 0.01 ‘\*’ 0.05 ‘.’ 0.1 ‘ ’ 1

#### 資料9：事前テスト・遅延事後テスト、目的節欠落

	自由度	平方和	平均平方	統計量	Pr(>F)	$\eta^2$
テスト	1	0.002050	0.0020502	1.0205	0.3152	0.01111
群	2	0.002302	0.0011509	0.5729	0.5660	0.01248
テスト・群	2	0.003370	0.0016848	0.8386	0.4357	0.01827
残差	88	0.176783	0.0020089			
計	93	0.184505				

(注) 0 ‘\*\*\*’ 0.001 ‘\*\*’ 0.01 ‘\*’ 0.05 ‘.’ 0.1 ‘ ’ 1

#### 資料10：事前テスト・遅延事後テスト、能動態→受動態

	自由度	平方和	平均平方	統計量	Pr(>F)	$\eta^2$
テスト	1	0.000120	0.00012024	0.1891	0.6648	0.00202
群	2	0.001131	0.00056574	0.8896	0.4145	0.01905
テスト・群	2	0.002144	0.00107225	1.6861	0.1912	0.03612
残差	88	0.055963	0.00063594			
計	93					

(注) 0 ‘\*\*\*’ 0.001 ‘\*\*’ 0.01 ‘\*’ 0.05 ‘.’ 0.1 ‘ ’ 1